

日本語教員養成における SNA を援用した「つながる」力育成に関する考察
 THE ANALYSIS OF THE COMPETENCES ON BUILDING SOCIAL RELATION IN
 JAPANESE TEACHER TRAINING COURSE

鴈野恵, 筑紫女学園大学
 Megumi Karino, Chikushi Jogakuen University

1. はじめに

本研究は、日本語教員養成課程における日本人学生の「つながる」力育成を交換留学生との相互交流活動を通して観察、考察したものである。

母語を教える日本人日本語教員にとって最初の壁は、日本語や日本文化を外側から見る視点の習得である。過去の研究(鴈野; 2016)では、大学養成課程で模擬授業を通じた履修生の学びを調査し、自身の日本語および日本文化に関する知識不足が上位という結果となった。日本語母語話者にとり、日本語および日本文化はあまりにも身近であるため、客観視する視点を持ちえない。特に、社会経験、異文化経験を持たない大学生にとり、この視点の習得は難しいことと推察される。では、大学生がそうした視点を習得する方法として、授業内でできることの一つとして、まずはじかに学習者と接することで気づきを得ることが最も確実かつ早道であると考えた。

また、當作(2013)において、21世紀を生き抜く若者像が述べられている。當作(2013)では、外国語教育の立場から、ソーシャルネットワークアプローチ(Social Network Approach; SNA)を「他人とつながることで、相手と自分を比較して、結果的に自分のことがよく理解できるようになる」と説いている。具体的には、「つながる力」を3領域で説明している。一つ目の言語領域では、「主体的、積極的な人間関係の構築」、二つ目の文化領域では、「多様な文化的背景を持つ人との相互作用」、三つ目のグローバル社会領域では、「グローバル社会のネットワークに関わり、協働により社会の問題を解決」とされる。

日本語教師として学習者と交わりを持ちながら自身を絶えず成長させることのできる教師たること、また学習者にそうした資質を望むこと、そして、日本語教師を職業としない場合でも上述の資質を備えることは極めて有益であることから、SNAの考えを援用し、留学生の授業に参加させることを試みた。本研究では、この実践のなかで、どのような「つながり」が生み出されるのか検討を行う。

研究課題として、次の二点を設定する。

①留学生と日本語教員養成課程履修生のインターアクションにおいて、日本語教員養成課程履修生は何に着目し、どのような気づきを得るか。

②留学生は、留学生活においてどういった交流相手と深く関係を築くか。

日本語学習者と日本語母語話者の「つながり」に関する研究で横田(1991)、小松(2013)があり、共通する点は、留学生は留学生に、日本人学生は日本人学生により深く自己開示を行い、留学生は孤立する傾向があると指摘している。小松(2013)では、双方に友人形成に積極的な関心があったとしても、制度的支援を得られない場合は友人形成に至らないと述べられている。本研究の対象は交換

留学生であるが、この場合、カリキュラム上、さらに孤立することが見込まれる。そのため、教員による友人形成を狙った何らかの活動支援が必要となってくる。こうした研究背景をもとに、上記研究課題を掲げ、日本語教師を目指す側の学生の「つながる」力涵養の活動分析および留学生側の「つながる」力の実態把握を行っていく。

2. データ分析

2-1. 実践概要

まず、実践活動を概観する。本活動は、交換留学生5名の日本語クラスに日本語教員養成課程履修生を入れた交流活動である。活動の目的は、日本語を客観視する視点を身につけること、友人形成であった。交換留学生の国籍は、中国2名、台湾3名であった。交換留学生は、学部とは別途のカリキュラムで運営され、専用の時間割で進められている。日本語レベルは、上級前半で5名のうち4名がN2に合格している。本研究で対象とする日本語クラスは、『日本語上級話者への道』を用い、口頭能力向上を主眼とした授業である。次に、日本語教員養成課程履修生であるが、文学部（日本語・日本文学、英語、アジア文化のいずれかを専攻）に所属する学生35名を対象とし、学年は4年生、全員女性であった。履修生は、1学期に1回、留学生の授業に参加することが義務付けられていた。活動の内容は、回ごとに異なり、留学生の調べ学習の発表の相談、決められたトピックで各自の考えを話し合うといったものであった。

2-2. 研究方法

前述の二つの研究課題を明らかにするべく、この活動に従事した履修生と留学生に調査を行った。まず、研究課題①の調査として、日本語教員養成課程履修生を対象に質問紙調査を行った。課題は自由記述によるもので【留学生との会話活動を通しての気づき、学び】を書くものであった。得られた回答は、得られた回答は、テキストマイニングの手法を用い分析した。テキストマイニングは、フリーソフトのKH Coderを利用し、自由記述文への抽出語解析を施し、共起ネットワークを作成し分析を行った。次に、研究課題②の調査として、留学生には主に「留学生活における日本人学生との交わり」を軸とする半構造化インタビューを行った。

2-3. 研究結果

研究課題①に関し、得られたデータに対し抽出語解析を行った結果、上位頻出語を表1、共起ネットワークを図1に示す。

表1 出現回数上位5語

順位	抽出語	出現回数
1	思う・感じる (29)	29
2	日本語 (16)	16
3	使う (10)	10
4	勉強 (9) / 話す (9)	9

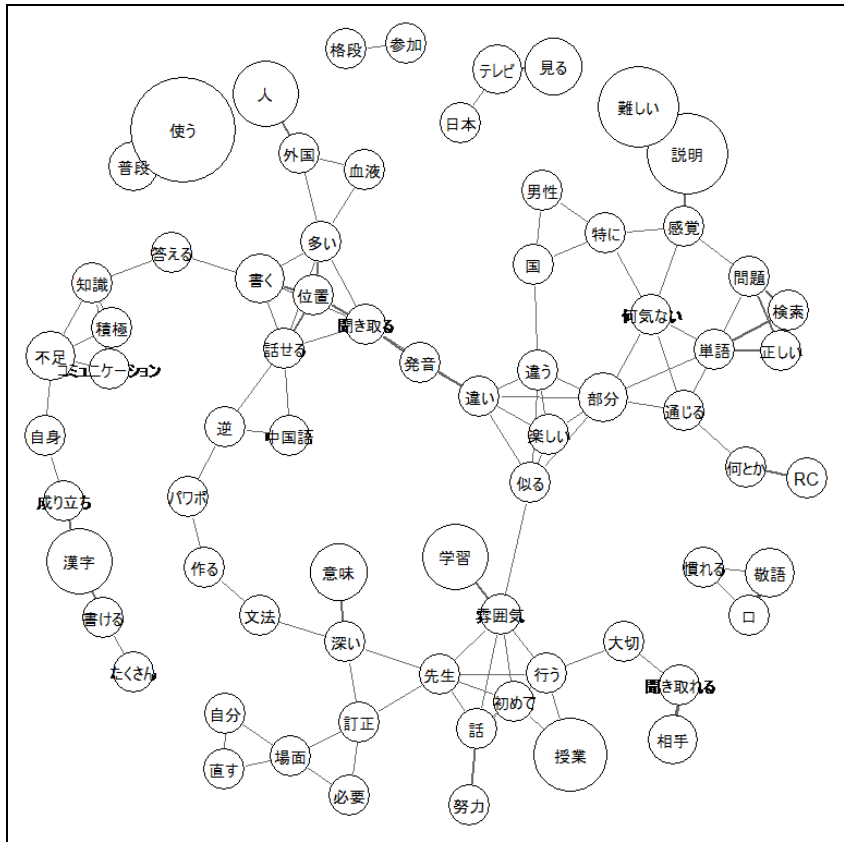


図1 質問紙の記述分析（共起ネットワーク）

共起ネットワークから履修生の次の3つの気づきが明らかになった。

気づき1：留学生の実力・努力

日本人履修生は留学生と約半年前に知り合っている。そのため、日本語の伸びを目の当たりにしており、その努力や向上心に対する尊敬の気持ちを述べる記述が見られた。また、外国語で自分の考えをうまく表現している様子も自分にはできないこととし、刺激を受けている。こうした留学生の持つ実力や、自分たち以上だと映る努力の様子に最も目が向いているといった結果になった。

- ・日本語だけでなく、日本の文化についても理解していて、そのことをすべて日本語で話してくれたことに驚きましたし、その熱心さがすごいと思い、とても勉強になりました。
- ・話を聞いてすごく努力していると思ったので、わたしも努力しなければならないと思いました。

気づき2：コミュニケーションスタイルの違い

異文化間コミュニケーションの過去の研究にあるように、各文化においてコミュニケーションスタイル、価値観は異なる。それに対する気づきを記述したのがこのカテゴリーである。日本人学生は比較的自己開示に段階を踏む傾向があると

され、初対面の場合、打ち解けるのに時間がかかり、グループ活動での開始糸口に教員は骨を折るが、留学生との場合はそれが極めてスムーズである。日本人の価値観やコミュニケーションスタイルと中国・台湾のそれとが異なり、特に、初対面の場面では良い相互交流が生まれることが多々ある。

また、本調査の対象は4年生で、下位学年で異文化コミュニケーションの科目も履修しているため、授業で学んだこととの関連付けがなされていたかどうか、今後の調査課題としたい。

- ・とてもフレンドリーで会話が本当に楽しんできました。
- ・積極的に話してくれるため、コミュニケーションがとりやすかった。
- ・わからないことはわからないとはっきり言ってくれるので日本人より話しやすいかもと感じた。

気づき3：日本語・日本文化の知識不足

今回の活動内容には、留学生の発表準備をサポートするといったものが含まれていた。留学生自身が設定したテーマで調べ学習を行い、日本人学生へのインタビュー調査なども含んだプロジェクトワークであった。準備段階では、日本語の間違いの訂正だけではなく、内容についての深いディスカッションもあり、日本人履修生には難しいこともあったことが窺える。

- ・いつも何気なく使っているからこそ、わざわざ意味を調べたりしないし、人に聞かれたりすることもないので、そういった感覚で理解していることは特に説明が難しかった。
- ・助詞の使い方に問題があったので説明しようとしたのですが、感覚的に覚えてしまっていたので、説明がとても難しかったです。

その他

その他に、日本語教師としての視点の習得が見られたかどうか、という観点で次のコメントを抜粋する。全体から見ると少数ではあるが、日本語教師として日本語学習者を見る姿勢で次のようなことが述べられており、実践者としての筆者はこの部分を一つの成果としたい。

- ・慣用句を使って経験を話すことで、外国の人の会話も日本人らしくなってくる感じがしました。
- ・初めて□□先生に会ったが、学習者を引き付ける力やわたしたちの会話を聞いてそこから話を広げたり、とても上手に行っていて、授業の雰囲気作りなど勉強になった。
- ・しゃべるのは留学生のみなさん上手で、よく聞き取って話せるなあと感心しましたが、ノートの方が小さい「っ」の位置や「ー」の音の位置が間違えて書かれていることが多く、聞くと書くを一致させるのは難しいんだなと思いました。
- ・「なくした時にとっても落ち込んだ」と言いたいのを「なくした時にとっても緊張した」と言っていて、中国語をそのまま使っているのが何度か見受けられた。母語の影響を大きく受けているなと感じた。

研究課題②に関して、留学生3名に日本での友人形成を軸とした半構造化インタビューを行った。その結果、前述のような活動で知り合った日本人学生というより、寮のルームメイト、中国・台湾への留学経験者、寮の別の部屋の学生といった順で親しく交わっていることが明らかになった。孤立する傾向にある交換留学生コースにあって、寝食を共にする相手とは強い結びつきをもつことができることは予想に難くない。では、教員が授業内でこうした活動を用意したところで何にもならないということではなく、きっかけは提供しているとのことで、学内で会えば、日本人学生から声を掛けてくることもあるとのことであった。また、多様なトピックで話し合いを持つことから、普段話し合わないようなことも話せ、良かったと述べていた。このことから、今後もこうした交流の機会は継続し、有機的な機会となるよう質と量を探っていきたい。

3. 結論

本研究では、日本語教員養成課程履修生が留学生との活動を通し、自分自身へ目を向ける気づきを得たことが分かる。自分自身の努力のしかた、コミュニケーションスタイル、知識不足といったことを、留学生という他者を通して気づきを得ていた。

履修生、留学生ともに双方「話せてよかった」といった肯定的感想を持つのは共通していた。しかし、漠然なものに留まった内容も多く、教師による介入の質と頻度の見直しの必要が明らかになった。限られた時間内で、関係構築の深化を促す為には、具体的道筋、すなわち双方へ目標設定、事前・事後活動の精密なデザインが求められる。

参考文献

- 鷹野恵 (2016) 「大学における日本語教員養成副専攻課程の学びの様相に関する考察:模擬授業のふりかえりシートの抽出語分析」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』11,1-13.
- 小松翠 (2013) 「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』12,71-86.
- 當作靖彦 (2013) 『NIPPON3.0の処方箋』講談社
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の伝承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版
- 横田雅弘 (1991) 「自己開示から見た留学生と日本人の友人関係」『一橋大学論叢』105-5,57-75.